

## 公開セミナー『政治思想』の現在について

原 武 史

2008 年 10 月 7 日から 12 月 16 日にかけて、明治学院大学国際学部付属研究所主催の公開セミナー『政治思想』の現在」が 9 回にわたって開催された。各回の講師名、対談者名とテーマは次の通りである。

- 1 10 月 7 日 雨宮処凛×高橋源一郎 「蟹工船」ブームをめぐって
- 2 10 月 14 日 鎌田慧 「民主主義」的管理主義と管理社会
- 3 10 月 21 日 福田和也×原武史 昭和天皇をめぐって
- 4 10 月 28 日 鈴木邦男×原武史 戦後日本と右翼
- 5 11 月 1 日 桐野夏生×原武史 文学と政治思想の対話 1
- 6 11 月 14 日 湯浅誠 反貧困の政治思想
- 7 12 月 2 日 重松清×原武史 文学と政治思想の対話 2
- 8 12 月 5 日 北田暁大 現代若者のナショナリズム
- 9 12 月 16 日 中島岳志 アジア主義、その思想と系譜

各回ともに、時間は午後 4 時 45 分から 6 時 15 分までの 1 時間半とし、そのうちの 1 時間を講演ないしトーク、30 分を会場からの質疑応答にあてた。公開セミナーであるため、本学学生以外の参加も自由とし、入場は無料とした。開催を前に、『朝日新聞』『毎日新聞』『神奈川新聞』などで広く告知したほか、東急線の車内で見ることのできる明治学院大学の広告「MG NEWS」にも 2 回にわたって宣伝した。

そのせいか、会場が都心から離れている上、平日の早い夕方だったにもかかわらず、毎回 300 人近く、多いときには 500 人近くの方々に参加していただいた。高齢者や主婦の方々が多かったのは予想どおりだったが、本学の学生よりも他大学の——私が確認しただけでも、慶應、早稲田、青山学院、東洋、立正、昭和女子、神奈川工科など多岐にわたる——学生が多く混じていたのは予想外であった。もとより、お呼びした講師や対談者ご自身の人間的な魅力もあったろう。しかし「政治思想」というテーマが、いまでも多くの人々の関心を集められると実感したこともまたたしかであった。

では、なぜ『政治思想』の現在」だったのか。

それはひとえに、2008 年 4 月より国際学部付属研究所の所長となった私の専門が日本政治思想史であることによる。こう言えば身も蓋もない話になってしまうが、この公開セミナーでお呼びした講師や対談者の陣容を見れば明かなように、そこには第 9 回の中島岳志さんを除いて、政治思想を専門とする学者は一人も入っていない。にもかかわらず、なぜ「政治思想」が共通テーマになるのか。

これについては、もう少し説明が必要だろう。

戦後の代表的な政治学者、丸山眞男は、60 年安保闘争の渦中で書かれた「現代における態度決定」(『世界』1960 年 7 月号所収)のなかで、こう述べている。

政治活動というものの考え方を、なにか普通人の手のとどかない雲の上の特殊なサークルで、風変わりな人間によって行われる仕事と考えないで、または私たちの平凡な日常生活を断念してまったく別の世界にとびこむことのように考えないで、私たちのごく平凡な小さな社会的義務の履行の一部として考える習慣——それがどんな壮大なイデオロギー、どんな形式的に整備された制度にもまして、デモクラシーの本当の基礎です。

丸山の言う「政治活動というものの考え方」は、「政治思想」あるいは「政治思想の研究」という言葉に置き換えることができる。つまり政治思想というのは、専門家が「普通人の手のとどかない雲の上」で研究していればいいようなものではなく、在家仏教と同じように、一般の人々が日常的に政治について考える習慣がつかなければ、デモクラシーは確立しないと言っているわけだ。

たしかにそこには、丸山から見れば日本にいままだ根付いていないデモクラシーを確立させなければならぬとする、いかにも「戦後啓蒙」らしい上からのまなざしがある。しかし、60 年安保闘争以降、一部の例外を除いて見逃されてしまったような、政治思想に対する開かれた考え方があることもまた否定できないだろう。

というのも、政治思想という学問は、とりわけ丸山がいわゆる大学紛争によって東大を早期退職した 1970 年以降、かえって現実政治や日常生活との接触を失い、「普通人の手のとどかない雲の上の特殊なサークル」で研究する傾向が強まったように思われるからだ。政治思想と聞いて、反射的に古典古代のプラトンやアリストテレスから、20 世紀のフーコーやハーバーマスに至るまでの難解な著作を思い浮かべ、自分にはとてもわからないと敬遠する人は決して少なくないだろう。

もちろん、古典的な思想家の著作をもとに、広く現代の世界や日本で起こっている諸問題に鋭くメスを入れることのできる学者もいないわけではない。私事ながら、大学時代のゼミでご指導いただいた藤原保信先生は、このような思考＝志向をもつ数少ない学者の一人であった。しかし多くは、「普通人」から見れば抽象的で、理解不能な概念を精緻化する作業に終始しているのが実情だと思う。丸山が図らずも予言したように、政治思想を研究するためには、いつしか「私たちの平凡な日常生活を断念してまったく別の世界にとびこむ」ぐらいの覚悟がなければならなくなったのである。

私自身、一研究者として、こうした実情にはかねてより危惧を抱いてきた。いま一度、60 年安保闘争の原点に戻り、政治思想を現代に生きる「普通人」の視点からとらえ直すことはできないか。専門家が古今東西の有名な思想家を通して政治思想を語るのではなく、一見政治思想とは関係のない人々が、誰にでもわかる言葉で「政治思想」を語ることはできないか。公開セミナーの統一テーマを『政治思想』の現在」とした背景に、私自身のこのような強い思いがあったことは否めない。

もちろん、60 年安保闘争の時点と現在では、時間にして半世紀年近くの隔りがある。一般市民が日米安全保障条約の是非をあれほど問題にすることは、もうほとんどなくなった。だが、その代わりに現在には、半世紀前にはなかったさまざまな問題が噴出していることもまた事実である。格差社

会、貧困、民主主義、天皇、右翼、郊外、集団、ナショナリズム、アジア。この公開セミナーでは、現代日本を考える上で欠かせないこれらのキーワードを軸に、『政治思想』の現在」を語るのに最もふさわしい方々を講師や対談者として呼ぶことができたと自負している。

さらに言えば、これらのキーワードを軸にした背景には、私自身が 2007 年から 2008 年にかけて『滝山コミュニティー九七四』（講談社）、『昭和天皇』（岩波新書）という二つの著書を出し、民主主義や郊外、集団、天皇制などの問題を世に問うたという事情がある。講師や対談者の多くは拙著を読み、新聞や雑誌で拙著に言及していたため、問題意識を共有できると考えたことも大きかった。

各回のテーマと講師ないし対談者、およびその内容について、簡単に触れておきたい。

第 1 回『『蟹工船』ブームをめぐる』で対談した雨宮処凛さんと本学国際学部教授の高橋源一郎は、2008 年 1 月に『毎日新聞』紙上で一度対談している。これが『蟹工船』ブームのきっかけとなったと言われている。雨宮さんは格差社会や派遣労働者の実態に詳しい一方、フリーター支援の組合活動にかかわり、同年 10 月には後述する湯浅誠さんとともに首相の麻生太郎邸見学ツアーを企画された。この対談の途中でも、麻生邸見学ツアーに対する警察の妨害の様子が映像に流された。対談では、雨宮さんのこれまでの経歴が語られるとともに、昭和初期に小林多喜二が描いた『蟹工船』の世界と、21 世紀初頭の日本の現実との奇妙な符合が浮き彫りにされた。

第 2 回『『民主主義』的管理主義と管理社会』は、トヨタ自動車の期間工として働かれた体験をもつノンフィクション作家の鎌田慧さんが、拙著『滝山コミュニティー九七四』に対して一つの応答をされたものと解している。「民主主義」の名のもとに、教育現場だけでなく企業においても班が編成され、「個」が「全体」に奉仕するような体制が崩壊的につくられてゆくさまが説得的に語られる。ひばりヶ丘、清瀬と西武沿線を転々とされ、お子さんを団地の小学校に通わせた鎌田さんの問題意識は、同じ西武沿線の小学校で「滝山コミュニティー」を体験した私自身のそれと驚くほど近いように感じた。

第 3 回「昭和天皇をめぐる」は、いま『文藝春秋』に「昭和天皇」を連載中で、その前半部分をすでに単行本にされた文芸評論家の福田和也さんとの対談である。どちらかといえば史料の断片的な記述から禁欲的に天皇の内面を推し量ろうとする拙著『昭和天皇』に対して、福田さんの描く昭和天皇はより立体的で、あたかも大河ドラマのストーリーを追うような面白さがある。乃木希典、原敬、石原莞爾など、近代日本の政治家や軍人を数多く描いてきた福田さんならではの手法だろう。しかし双方の天皇像は対立しあうどころか、むしろ相補的な関係にあることが、この対談からも確認できた。

第 4 回「近代日本と右翼」は、新右翼団体の一水会で長らく活動されてきた鈴木邦男さんとの対談である。これまで、戦後思想史は前述した 60 年安保闘争をはじめ、ベトナム反戦運動、全共闘運動、連合赤軍あさま山荘事件など、主に左翼や新左翼の観点から語られてきた。だがそれだけでは、平成に入ってからナショナリズムの復権を読み解くことはできない。1970 年に三島由紀夫とともに割腹自殺した森田必勝と付き合いのあった鈴木さんをお呼びしたのは、昭和から平成に至る右翼思想の流れを、その時代に居合わせた「生き証人」の立場から語っていただきたいからである。

第 6 回「反貧困の政治思想」は、『反貧困』（岩波新書、2008 年）で大佛次郎論壇賞を受賞された湯浅誠さんが、〈溜め〉というキーワードを用いながら、いま日本で起こっている貧困の問題をわか

りやすく解説されたものである。湯浅さんは、昨年末から今年はじめにかけて日比谷公園につくられた「年越し派遣村」の村長となったことで一躍有名になったが、もともとは私と同じく、東大の大学院で日本政治思想史を専攻されていた。政治思想を学問と運動の両面からとらえることのできる希有な人材であり、公開セミナーの趣旨にもぴったり一致する話をしていただけたと解している。

第8回「現代若者のナショナリズム」は、東浩紀さんとともに雑誌『思想地図』（NHK 出版）を編集するなど、現代思想の最先端で活躍する社会学者、北田暁大さんが、第4回の鈴木邦男さんとは異なり、学者として一歩引いた立場から現代日本のナショナリズムについて分析されたものである。数々のデータが駆使されながら、いま若者の間にナショナリズムが広まっているという説がいかにも根拠がないかが論じられる。またたとえ若者がナショナリズムを信奉したとしても、かえって疎外感が増すだけだという回答が示される。社会学から見た政治思想への重要な問題提起になったと思う。

第9回「アジア主義、その思想と系譜」は、『中村屋のボース』（白水社、2005年）で大佛次郎論壇賞とアジア太平洋賞を受賞されて以来、アジア主義やナショナリズム、東京裁判などについて活発な発言を続ける中島岳志さんが、明治から戦後までのアジア主義の系譜を振り返られたものである。それは一般には右翼に位置付けられるが、竹内好が注目したように、その思想的可能性の豊かさはいま一度検討に値する。なぜナショナリズムが右派の専売特許になったのかが歴史的に論じられることで、北田さんとは違った角度からナショナリズムというアポリアへの接近が試みられた。

さらに、第5回「文学と政治思想の対話1」と第7回「文学と政治思想の対話2」について一言しておきたい。

この2回の対談でお呼びした桐野夏生さんと重松清さんは、いずれも作家である。なぜ作家を呼んだのか。当然想定され得る質問だが、2人の小説は今回の公開セミナーで取り上げた問題と無縁ではないと感じていた。

具体的に述べよう。

桐野さんの『OUT』（講談社、1997年）は、東京郊外の弁当工場で働くパートの主婦が主人公である。貧困や郊外の問題が先駆的に描かれた小説にほかならない。また『東京島』（新潮社、2008年）では集団の問題が、最新作『女神記』（角川書店、2008年）では天皇制の問題があぶり出されている。一昨年から昨年にかけて『週刊文春』で連載された小説「ポリティコン」のタイトルが、アリストテレス『政治学』に出てくる「ゾーン・ポリティコン」（政治的動物）に由来することも付け加えておく。

一方、重松さんの小説には、『見張り塔からずっと』（角川書店、1995年）、『エイジ』（朝日新聞社、1999年）、『トワイライト』（文藝春秋、2002年）、『送り火』（同、2003年）など、ニュータウンや学校を舞台としたものが多い。そこでは桐野さんの小説と同様、郊外や集団の問題が扱われている。また『カシオペアの丘で』（講談社、2007年）や『とんび』（角川書店、2008年）では、一地方都市から見た戦後日本の「光」と「影」が見事に描かれている。

文学と政治思想の間には深い関係があると考えerゆえんである。

桐野さんも重松さんも、拙著「滝山コミュニケーション一九七四」を読んでもくださり、分不相応な評価をしていただいた。2回の対談では、どちらもこの拙著が話題にのぼった。私は、それぞれのご著書が政

治思想とどう結びついているかを論じたつもりである。2 回の対談をきっかけとして、桐野さんとは天皇や皇室をめぐる対談したし（『世界』2009 年 6 月号に所収）、重松さんとも郊外や集団をめぐる連続対談の計画がある。「文学と政治思想の対話」は、おそらくこれからもずっと続くことになるだろう。

最後に、この初めての試みを通して私が感じたことを記しておきたい。

私はふだん、国際学部の教授として、横浜校舎で学部の学生を相手に講義やゼミを行っている。教える側は、非常勤講師を別とすれば本学の専任教員、教えられる側は本学の学生という関係が、そこには成り立っている。この関係を解体することは、大学を解体することに等しい。

だが、公開セミナーでは、大学を解体しなくても、教員と学生の固定的な関係を崩し、聴きたい「教員」の講演やトークを、誰もが自由に聴きにきて質疑応答しあう関係が成立する。私は毎回、とうに忘れていた、ともに学び合う「知の共同体」ならではの熱気を感じないわけにはいかなかった。ここには理想とする大学のかたちがある——そう実感せずにはいられなかった。学部と研究所の仕事の両立は確かに苦労を伴うものであったが、毎回心地よい疲労感に包まれたのは、企画者としてこの上ない幸せであった。

最後になるが、ご多忙ななか、薄謝にもかかわらず一方的な依頼を快く引き受けてくださり、この公開セミナーを成功に導いてくださった講師や対談者の方々はもとより、熱心に参加してくださったすべての方々に対して、国際学部と同付属研究所を代表し、心よりお礼申し上げたいと思う。

付記。本稿は、原武史編『「政治思想」の現在』（河出書房新社、2009 年）所収の「巻頭言」を加筆修正したものである。